

---

# カフェオレ

きみよし藪太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カフェオレ

### 【Zコード】

Z0644M

### 【作者名】

きみよし敷太

### 【あらすじ】

最後の約束は守らなかつた。

最後の最後に、あなたには会いに行かなかつた。

他の女を選んだあなた。買つてあつた切符は無駄になつた。  
食欲つてなんだろう、あなたの身体以外口にしたいものなんてない  
のに。

約束の一時に、わたしは彼の家へ出掛けなかつた。  
さよならをするはずだつた日曜日の一時に、わたしは彼の家へ出掛けなかつた。

掛けなかつた。

他に大切な人が出来たのだと、風邪気味の低い声で告げた彼の声を耳にしてからもう五日が経つ。週の頭にそんな事を聞かされてしまつたので、休みになる日曜日までは時間が有り過ぎた。電話を何度もして、わたしよりその女が大事なのかと、わたしは誰よりもあなたを愛している自信があると、わたしを選びなさいよと何度も何度も言つたのだけれど、彼の気持ちは揺らぐだけで移行しなかつた。わたしには。わたしの方へは。泣き叫んだのは一度。受話器の向こうで困る彼の空気が流れてくるのが分かつた。

大好きで大切な人をそれ以上苦しめる事が、わたしには出来なかつたから。

さよならを告げられる人よりも、本当はそれを告げる人が苦しい事を、わたしは知つていたから。

日曜日の一時に、わたしは彼の家へ出掛けなかつた。遠距離恋愛で心まで離れてしまうなんて、チープな現実が痛かつた。

本当はまだ気持ちが固まりきっていないであろう彼に会つて、泣き喚く事だつて出来たのに。

出来たのに、わたしはそれをしなかつた。

愛していたから。

今も、これからも、ずっと。

その時間に何をしていたかといえば、女友達と温泉に出掛けてい

た。

「今週の射手座、ラッキー度一番らしいよ

「へえ」

「なに気のない返事してるのよ、あんた射手座だつたじゃない」「そんな事もあつたわね」

「そんな事もあつたって、星座は一生変わらないじゃないの」

昼過ぎのその変な時間に、温泉はなかなか混んでいた。それでも冬の腕が大地を抱いてしまっているこの時期にはさすがに外の露天風呂を使用する人間は少なく、わたしは友達とあたたかいのに寒いというまるで自分の精神状態のような温泉に浸かっていた。あまり泣いたのできつと涙の分の一キロが体内から無くなっているのだろう。ダイエットもしていないので薄くなつたお腹を撫でながら、わたしはぼんやりと湯に沈んでいた。

「帰り、奢るから美味しいものでも食べない？」

氣を利かしてくれる友達にちょっととした笑顔を返して、一呼吸置いてから「嬉しいな」と言つてみる。

美味しいものってなんだろう。

今のわたしにとつて美味しいのは、別れたあの男の腕で背中で、唇なのに。それ以外はもう、味なんて感じなくなつているのに。

「ケーキバイキングでも行こうか。今の時期だとモンブランのケーキとかさ、ガトーショコラが美味しいよね、チョコレート類つて幸せになる甘さよね。ショートケーキも好きなんだけど。お給料入ったばつかだから任せて！」

「いいね、ケーキ。甘いもの食べると幸せになるよね」

あの人気が大好きだつたチョコレート。もう、わたしはそれを一生口にしないだろう。あんな甘くて切なくて思い出だらけの幸せな食べ物。もう、一度と口にしない。

「……なによう、そんな顔しないでよ」

「あ、え、ごめん。……つて、わたしが謝るのも変だわ」

サウナに入りながら、熱いのが苦手な友達はさつさと逃げ出してしまつたけれど、わたしはぼんやりと座つたまま熱い空気を包まっていた。あの人と一緒にお風呂に入った事もあった。人の髪の毛を洗うのが大好きなわたしに、仕方がないと頭を貸してくれたりした

ものだつた。身体を洗つてあげるのも好きで、でも泡だらけのスponジと大好きな背中との間で格闘しているうちに、彼はするりとわたしの方へ向いてしまう。泡が唇に、と抵抗する間もなく、くちづけられてしまつたらもうアウトだ。後はひたすら甘くて濃くてどりうしょうもない唇にわたしのものであそばれてゆく。

あの唇がもうわたしのものではないというのが、この世で一番の悪夢だと思つ。

思つても、もう仕方がない事なのだけれど。

ぼんやりし過ぎていたせいで、温泉から上がつた時にはもうふらふらになつていた。先に上がって水分補給をしていた友達からは呆れられ、それでも風に当たればいいとドライブがてらケーキのお店に連れて行かれる。

茶色い木製の小さな店は、イートイン出来る可愛らしさといふだつた。

もうそろそろ晩飯の時間帯なんだだけね、と言われて時計に目を落とすと、確かに八時近くなつている。

「あれ、そんなに温泉入つてたつけ

「思えば遠くへ来たもんだ」

「それつて何だっけ

「分かんない、誰かの言葉

時間が遅かつたせいで、店は開いていたけれどバイキングは終わつていた。それでも、メニューに写真付きで載つてあるケーキ達は魅惑的で、友達はひとりではしゃぎながら注文を迷つている。

「何食べる？」

モンブランもいいけどイチゴのミルフィーユも気になるし、ホットケーキパフェってなんだろう、リンゴのパイも捨て難いしチョコもいいよねえ、とにかくこじしている彼女を横目に、わたしは時計ばかりを見ていた。

八時に、帰るはずだつたな、と。

八時の電車に乗つて、彼の家から帰る予定だつた。本当は、チケ

ットも買つてあつて、実はカバンの中に今も入つてゐるのだった。もう、意味がなくなつてしまつた紙切れ。八時の電車に乗つて、帰るはすだつた。泣き腫らした目で。どうして元に戻れないの、と、駅のホームで泣いていただろう。わたしが選択しなかつた時間に、存在したかもしないわたし。

ウェイトレスが注文を取りに来てしまつたので、カフェオレを注文した。友達は、それだけ? と不満そうな声を出したけれど、湯当たりして食欲がないと言つたらあつさり信じてくれた。

わたしの注文はすぐに運ばれてくる。

白い、ちゃんとカフェオレボウルに入つたやさしい茶色の液体。砂糖をいつもより多く入れた。ゆっくりとかき混ぜる。

幸せな、甘い香り。

あの人気が、苦いコーヒーを飲めないわたしの為にミルクを買っておいてくれていた事を思い出す。

すべてが、涙に繋がるのは、仕方がない事なのだろうか。

「……本当に、本当に、世界で一番愛していたの」

カフェオレは甘くて幸せな味がし過ぎた。遠い過去の記憶。あの人の、唇や背中や、腕の甘さ。

「あの人以外に、大切なものなんて何もなかつたの……」

一番届いて欲しい人に届かない言葉を吐き出しながら、わたしは両手でカフェオレボウルを包み込む。このやわらかな暖かさが、わたしを泣かせる。

つるり、と涙はこぼれて、途切れる事はなく、わたしは悲しい色の目をして声を失つてゐる友達を前に、ただただ泣き続けた。泣くしかできなかつた。

カフェオレが冷え切り、その甘さが中和してしまつぐらいまで泣き続けなくては、わたしの心は癒えないのだろう。泣くしかできなかつた。本当に、泣くしかできなかつた。

あの人を失くして、わたしは途方に暮れていた。どうやって生き

て行こうかと、小さく深く絶望して、わたしは幸せだった過去の為に、そしてもう一度手に入らないすべての為に、涙を流し続けていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0644m/>

---

カフェオレ

2010年10月8日14時38分発行